

2022（令和4）年度 福岡女子大学 一般選抜個別学力検査

〔 前期日程試験問題 〕

国際教養学科

国 語

【 90 分 】

注意事項

- 1 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
- 2 問題は4ページから18ページにあります。問題は全部で**3題**です。
- 3 解答用紙には裏にも解答欄があります。
- 4 試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁および解答用紙の汚れ等に気づいた場合は、手を挙げて監督者に知らせてください。
- 5 試験開始と同時に解答用紙の**受験番号欄**に**受験番号**を記入してください。
- 6 試験終了後、**問題冊子は持ち帰ってください。**

問題一 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。(ただし、設問の都合上、傍点などを省いたところがある。)

ヴァレリーほど引用される書き手はめずらしい。その詩の一句、断章の一文、講演の中で述べられた一言は、いくつもの言語に翻訳されて、雑誌のコラムや新聞記事、小説、哲学論文、手紙、演劇の台詞等々、さまざまな種類のテキストに登場しつづけている。あるときはエピグラフとして文章の冒頭にかかげられ、またあるときは議論を導く問いの役割を果たし、またあるときは結語の位置にすっぽりとはめこまれていたりする。詩人らしい口当たりのいい文句のせいだろうか、引用された言葉は口から口へ伝わる口頭伝承のようにつぎなる「孫引き」を誘発し、こうした引用の連鎖の果てに、もはや典拠が不明になっている場合さえある。もちろんあらゆるテキストが引用の織物であることは言うまでもなく、ヴァレリー自身この意見の積極的な支持者であったわけだが（「ライオンは同化されたヒツジからできている」、^A そうだとしても、このちりばめられ具合はやはり群を抜いている。文書や手紙など研究の対象となる資料の総体のことをフランス語でコーパス (corpus) と言うが、この語の原義は corps すなわち身体である。日々ヴァレリーのコーパスを前にしている者にとっては、まるでヴァレリーの身体が細かい断片となって世界中の新聞や書物に埋め込まれているように感じる。

なぜヴァレリーは引用されるのか。言い方を変えれば、いかにしてヴァレリーの言葉は、みずから引用させるのか。それは一種の力である。もとのコンテキストを離脱して、さまざまなテキストに入り込み、増殖する力。この旺盛な「繁殖力」とでもいうべき力は、ヴァレリーがフランス第三共和政を代表する文学者としてカッコたる地位を築いていたという事実を差し引いてもなお機能する、言葉そのものの力である。ヴァレリーはこの力を使って、作品をつくり、芸術について思

考えた。それはどのような力なのか。いったいどのような力が、ヴァレリーの詩を、散文を、^②ナイエン機関のように密かに動かしているのか。

力が働く様子を、引用の具体的な事例を通してみてみよう。ここ数年、引用のヒンドが急にあがっている表現がある。

^B〈ヨーロッパはアジア大陸の小さな岬になるだろう〉という、もともとは「精神の危機」と題されたテキストに見出される表現である。「精神の危機」は、一九一九年にイギリスの雑誌『アシニーム』に英訳掲載されたテキストであり、手紙の形式をとっているのは、「パリからロンドンへ」という発信者と受信者の空間的な距離を意識したものである。一九一九年においてパリからロンドンに送られた手紙のもつ意味は明白である。同じ連合国として第一次世界大戦を戦い、これまでに経験したことのない規模の人的・経済的な損害によってすっかり疲弊したヨーロッパの二つの国。フランスやイギリスという「かつての真珠」がアジアやアメリカの勢いにおされてその覇権を失いつつあるこの危機を目の当たりにして、ヴァレリーは〈ヨーロッパはアジア大陸の小さな岬になる〉とかなり痛ましい口調で述べたのであった。

一方、わたしがここ数年に新聞紙上やウェブサイトで出会ったこの言葉を引用しているテキストは、この第一次世界大戦後のヨーロッパの惨状に言及するためにヴァレリーを引用しているのではない。二〇〇九年にギリシャの新政権が過去の国家財政の粉飾決算を暴露した^④ことに直接の端を発する、いわゆる「欧州危機」について述べるためにこの言葉を引用しているのである。九十年の時を隔てて、新たなコンテキストを得たヴァレリーの言葉。それが有効性を持っているようにみえるのは、ある引用者は賞讃の意を込めて述べているけれども、「ヴァレリーに先見の明があったから」ではあるまい。ヴァレリーが政治学者や経済学者であったことは一度もないし、余人の及ばぬ D 眼を一方的に見出しては賞讃するこうした

態度は、「古典的作家」としての地位をヴァレリーに押し付けながら、その実ヴァレリーの言葉そのものから目をそらすことにしかならない。〈ヨーロッパはアジア大陸の小さな岬になる〉という表現がいまなお有効に感じられるのは、ヴァレリーの言葉が私たちに直接的に作用をおよぼす性質の言葉だからである。そしてその言葉とは無関係に、現代に生きる私たちがたまたま「欧州危機」という、ヴァレリーの言葉のシニフィエとなりうるような具体的な現実のなかにいるからである。

私たちに直接的に作用をおよぼす性質の言葉。ヨーロッパを〈アジア大陸の小さな岬〉と形容することの妙味は、地理的な意味での「事実」（ユーラシア大陸に占めるヨーロッパ地域の割合の小ささ）にもとづいて、国際社会におけるヨーロッパの政治的経済的文化的な影響力の減少についての隠喩を述べているという点にある。これをたとえば〈ヨーロッパは世界というデザート皿のサクランボにすぎなくなる〉と形容したならば、きわめてオーソドックスな隠喩を用いた比喩表現にとどまっていただろう。一般に、隠喩的な理解は字義通りの意味把握が不可能であるときに発動する理解のモードである。しかし〈ヨーロッパはアジア大陸の小さな岬になる〉^⑤においては、字義通りの理解と隠喩的な理解が共存しており、むしろ隠喩と事実の重なりこそが私たちが愕然とさせるのである。なぜ愕然とさせられるのか。それは、この隠喩と事実の重なりにおいて、わたしたちの頭のなかにあった隠喩が失効させられるからだ。つまり、「ヨーロッパは大きい」「ヨーロッパこそ世界の中心である」という、この表現に出会うまえにひとびとが漠然といただいていたはずの隠喩が、である。隠喩を否定する隠喩、とでもいえるべきだろうか。ヴァレリーはこの表現を用いることによって、私たちの頭のなかにあった「ヨーロッパは大きい」という隠喩的世界像に対し、「ヨーロッパは小さい」という地理的な事実をシオウトツさせ、この攻撃をもって、ヨーロッパの世界的影響力の減少という楽観ぬきの事実について、隠喩的に述べているのである。さらに、「ユーラシア大

陸」つまり「ヨーロッパ (Euro) + アジア (Asia) 大陸」を「アジア大陸」と呼び、ヨーロッパ「半島」を「岬」と言い換えることで、ヨーロッパからアジアへという世界の中心の移動を、思考における「視座の転換」としてわたしたちに身体的に実感させている。

ヴァレリーが隠喩を用いるとき、それはしばしば装飾的な修辭以上の働きをしている。ヴァレリーの言葉は、隠喩によって私たちを一気に思考させるようなところがある。それは思考のプロセスそのものを成型するような隠喩であり、そのときに味わうのは、「私」が考えるのではなく、隠喩によって考えさせられてしまうような体験である。思考の結果が隠喩によって表現されるのではなく、隠喩が思考をかたちづくり、前にすすめていく。これは奇妙な事態に思われるかもしれないが、そもそもすべての認識は、それが認識であるかぎり、隠喩的な性格をもつ。なぜなら認識とは、対象から受ける感覚データの純粋な受容ではありえず、何らかの「視座」にもとづく対象の「変形」をかならず含んでいるのだから。先ほどわたしは「隠喩的世界像」という言い方をしたが、正確には、^G隠喩的でない世界像などないのである。そうした私たちの認識のあり方そのものに、ヴァレリーの言葉はコミットする。「思考する」という意志をもつ人間の能動性すら一気に飛び越えて、読者の思考のプロセスそのものを作ってしまうこの直接性こそ、さまざまな引用者がそれを借りにやってくる、ヴァレリーの言葉がもつ力なのである。

ヴァレリーはこの「直接的な作用」を求めて言葉を磨きつづけたのではないか。もちろんすべての隠喩が先にみた表現と同じ構造をもっているわけではないし、ヴァレリーが隠喩のみにこだわって創作していたわけではない。本論で論じるよう

に、隠喩に限らず、トウチや脚韻、登場人物、語りのモードなど、詩を構成するさまざまな要素の使用法とその可能性についての研究にヴァレリーは精力をそそいだが、それはみなこの「直接的な作用」の追求に収斂するのではないか。そして、この「作用」をもつもののみが「作品」の名に値する、とヴァレリーは考えていたのではないか。

はつきりさせておかなければならないのは、ここで問題にしているのは、ヴァレリーの「文体」ではない、ということである。われわれの関心は、ヴァレリーの言葉のもつ「美的な質」ではなく、その「作用のしかた」にある。この作用は、ひとつの句という細部のレベルのみに関わるものではない。句における作用は、句の集合体、つまりひとつの詩作品が、出版され、世に送り出されてはたすべき作用と、相似した関係下におかれている。〈ヨーロッパはアジア大陸の小さな岬になるだろう〉といった個々の細部を構成する表現が私たちにおよぼす作用と、作品が読者のもとに送られてはたす作用の同型性。よくよく考えればきわめて当たり前の関係ではある。しかし前者は修辭的で内在的な問い（これはどのような表現か？）であり、後者は社会的かつ存在論的な問い（作品とは何か？）である。ひとつのテクストを無数の興味深い細部の集まりとみなすのか、それともさまざまな力線が交差する社会のなかのひとつの点とみなすのか。これらの観点はまるで二者択一のように扱われ、^H両者の相似関係はしばしば見落とされてしまう。とりわけヴァレリー研究においては、そもそも社会的・存在論的な問いが、修辭的・内在的な問いにくらべて、きわめて少しか投げかけられていないという事情がある。

しかし、ただ趣味として詩をつくっていたのではなく、作品としてそれを世に発表し、流通させてきた詩人、ましてや「発表」することに対してきわめて強い反省的意識を持っていた詩人が、みずからの作品の社会的な位置づけと、一句一句の表現のあいだの関係を考えなかつたはずがあるまい。別の言い方をすれば、ヴァレリーは、美的な質の良し悪しだけを唯

一の基準として詩をつくっていたはずはなく、自分は何のために作品をつくるのか、社会に発表された作品はどんな存在価値をもつのか、といった問いをかかえながら、詩を作っていたはずなのである。

社会的・存在論的な問いと修辭的・内在的な問いとが交差する領域、これを問うのは、「芸術哲学」の仕事である。芸術哲学は「詩学 (Poétique)」あるいはヴァレリーの言い方にならっていえば「制作学 (Poétique)」というものは異なる。詩学や制作学は作品を作る方法の学であり、作るという行為を反省的に分析すればその要件は満たされることになる。一方本書が意図するのは、作るという行為への、社会的・存在論的な問いの、ときに意識的でときに意識せぬ貫入である。「詩学」のように内在的・反省的に創造行為をとらえるのではなく、みずから行っている行為の価値を問うメタ的な視点との⁹オウカンのなかで、創造行為が確信に満ちたものとなる、その様相を本書はとらえる。もつとも、ヴァレリー自身は、「芸術哲学」という言葉を使ってはいない。しかしヴァレリーによって書かれたテキストをシヨウサイに読むと、あるいは異なるテーマで書かれた二つのテキストをつきあわせてみると、そこに「貫入」の諸相がきわめて明瞭にあらわれてくるのがわかる。ヴァレリーによってすでに体系づけられた芸術哲学を読み解くのではなく、ヴァレリーのさまざまなテキストにその芸術哲学を読みとること、これが本書の目的である。

(伊藤亜紗『ヴァレリー 芸術と身体哲学』より)

注 ヴァレリー……フランスの詩人・思想家・批評家(一八七二—一九四五)。

「ライオンは同化されたヒツジからできている」……ヴァレリーの著作の一節。

シニファイエ……記号としての言語が指し示す概念、意味内容。

問一 傍線部①～⑩のカタカナは漢字に、漢字はひらがなに改めなさい。

問二 傍線部A「ライオンは同化されたヒツジからできている」の(1)「ライオン」と(2)「ヒツジ」について、筆者はそれぞれを何の比喻としてとらえているか。文中の言葉で答えなさい。

問三 傍線部B「ヨーロッパはアジア大陸の小さな岬になるだろう」という表現は、どのような背景によって生み出されたものか、答えなさい。

問四 傍線部C「この言葉を引用しているテキスト」とは、何を背景とするテキストか、答えなさい。

問五 空欄 D に入る最も適切な語句を、次のうちから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 審美 イ 近視 ウ 選球 エ 熊鷹 オ 千里 カ 処世

問六 傍線部E「字義通りの理解と隠喩的な理解」の(1)「字義通りの理解」と(2)「隠喩的な理解」とは、それぞれ何をさすか答えなさい。

問七 傍線部F「わたしたちの頭のなかにあった隠喩が失効させられる」の「隠喩」とは、何をさしているか答えなさい。

問八 傍線部G「隠喩的でない世界像などない」とあるが、なぜそのようなように言えるのか、説明しなさい。

問九 傍線部H「両者の相似関係」とは、何と何がどのような関係にあることをさすのか、答えなさい。

問十 筆者のいう「芸術哲学」と「詩学」の違いについて、わかりやすく答えなさい。

問十一 言葉の「直接的な作用」(7ページ)について、あなたはどうか考えるか。三百字以内で述べなさい。

問題二 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。(ただし、設問の都合上、送り仮名、返り点などを省いたところがある。)

上行^{キテツ}出^ニ中渭橋^ニ。有^{リテ}一人^一從^リ橋下^一走出^{リツ}。乘輿^ノ馬驚^ク。於^レ是^ニ使^メ騎^ヲ捕^フ、

屬^ス廷尉^ニ。張鞫^ノ之^ニ治問^{スルニ}、曰^{ハク}、梟人^{ルニ}來^ル、聞^{キテ}蹕^{ヒツ}匿^{ラル}橋下^ニ。久^{シク}之^ヲ、以^テ為^ラ

行^ニ已^グ過^ニ。即^チ出^{ヅルニ}、見^テ乘輿^ノ車騎^ヲ、即^チ走^{ルト}耳^ト。廷尉^奏當^{スルニ}、一人^一犯^ス蹕^ヲ、當^{スト}

罰金^ニ。文帝^怒曰^{ハク}、此人^ノ親^{みづから}驚^{カス}吾^ガ馬^ヲ。吾^ガ馬^{さいはヒニ}賴^{ナリ}。柔和^{ナリ}。令^{メバ}他^{ナラ}馬^一、固^{ヨリ}

不^{ラン}敗^セ傷^ヲ我^ヲ乎^ヲ。而^{ルニ}廷尉^乃當^{スト}罰金^ニ。鞫^之曰^{ハク}、法者^ハ、天子^ノ所^ニ與^ニ天下^ト

公共^{スル}也^上。今^レ法^如此^{クノ}。而^{ルニ}更^レ重^ク之^ニ、是^レ法^不信^{ナラ}於^ニ民^ニ也^一。且^ツ方^{タリテ}其^ノ時^ニ、

上^{メバ}使^{チドコロニ}立^セ誅^レ之^ヲ則^チ已^{マン}。今^既下^ニ廷尉^ニ。廷尉^ハ天下^ノ之^ノ平^也也^一。一^{タビ}傾^{カバ}、而^レ天下^ノ

用^{フルニ}法^ヲ、皆^{サン}為^レ輕^ニ重^ヲ。民安所措其手足。唯^ダ陛下^{セヨト}察^レ之^ヲ。良久^{ヤヤシクシテ}、上^{ハク}曰^ク、廷尉^ノ当^ト是^ト也^ト。

(『史記』による)

注 上……前漢の皇帝、文帝。 中渭橋……渭水(川の名)にかかる橋の名。

騎……騎兵。 廷尉……裁判・刑罰などを司る官人。 張積之……廷尉の名。 治問……尋問。

県人……田舎者。 蹕……貴人の行列が通る時に、役人が先払いをすること。

問一 二重傍線部①「以為」②「已」③「固」の読みを答えなさい。

問二 傍線部A「走」の主語を、次のうちから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 上 イ 騎 ウ 廷尉 エ 県人 オ 吾馬

問三 傍線部B「奏レ当」の「当」とは、何が何に相当すると言ったのか、その内容を現代語で答えなさい。

問四 傍線部C「文帝怒曰」について、文帝が怒った理由を答えなさい。

問五 傍線部D「法者天子所与天下公共也」の意味を、現代語で答えなさい。

問六 傍線部E「更重レ之」の意味を、指示語の内容がわかるように答えなさい。

問七 傍線部F「上使立誅之則已」の意味として最も適切なものを、次のうちから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 文帝が廷尉をすぐに誅殺しようとするなら、以前から騎兵に命じておくべきだった。

イ 廷尉が文帝の命令で県人をすぐに誅殺しようとした時、県人は行方不明になっていた。

ウ 文帝がその場ですぐに命じて県人を誅殺していたら、それで処断は終わっていた。

エ 廷尉の主張した意見を聞き入れたら、文帝はすぐに騎兵に命じて県人を誅殺するだろう。

オ 文帝の命令を受けて廷尉が取り調べる前に、騎兵が県人をすぐに誅殺してしまった。

問八 傍線部G「民安所措其手足」を「たみいずくにかそのしゆそくをおくところぞ」と読むには、どのように返り点を付

ければよいか。解答欄の白文に返り点を付けなさい。

問九 傍線部H「是也」とは、誰が何をどのように認めた発言か、答えなさい。

問十 『史記』の作者名を次のうちから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 昭明太子 イ 孟子 ウ 司馬遷 エ 陶潜 オ 王陽明 カ 王安石

問題三 次の文章は『宇治拾遺物語』の一節である。田舎住まいの侍が困窮し、かつて都で長年仕えていた主人（故殿）の

家を訪ねた。この家を継いだ今の家主は、故殿の実子なのかを周囲の人々に疑われていた。読んで、後の問に答えなさい。

見参らせば、御出居でみのさま、故殿のおはしまししつらひ①につゆかはらず。御障子などはすこし古りたるほどにやと見る

ほどに、中の障子を引き開くれば、きと見あげたるに、この子と名乗る人、歩み出でたり。これをうち見るままに、この年ごろの侍、さくりもよよに泣く。袖Aもしほりあへぬほどなり。このあるじ、いかにかくは泣くならむと思ひて、ついゐて、

こは、などかく泣くぞと問ひければ、故殿のおはしまししに違はせおはしまさぬが、あはれにおぼえてと言ふ。さればこそ、我も故殿には違はぬやうに覚ゆるを、この人々の、あらぬなど言ふなる、あさましきことと思ひて、この泣く侍に言ふやう、

おのれこそことのほかに老いにけれ。世の中はいかやうにて過ぐるぞ。我はまだ幼くて、母のもとにこそありしかば、故殿のありやう、よくも覚えぬなり。おのれこそ故殿とたのみであるべかりけれ。何事も申せ。またひとへに頼みてあらむずるぞ。まづ当時寒げなり。この衣着よとて、綿Bふくよかなる衣一つ脱ぎ②て賜びて、今はさうなし。これへ参るべきなりと言ふ。

この侍、しおふせてゐたり。昨日今日の者のかく言はむだにあり、いはむや故殿の年ごろの者のかく言へば、家主笑みて、

この男の年ごろ術②なくでありけむ、不便のことなりとて、後見召し出でて、これは故殿のいとほしくし給ひしものなり。まづ、かく京に旅立ちたるにこそ。思ひはからひて沙汰しやれと言へば、ひげなる声にて、む③、といらへて立ちぬ。この侍は、

そらごとせじといふ事をぞ、仏に申しきりてける。

さて、この主、我を不定げに言ふなる人々呼びて、この侍に事の次第言はせて、聞かせむとて、後見召し出でて、明後日、これへ人々渡らむと言はるるに、さるやうに引きつくりひて、もてなしすさまじからぬやうにせよと言ひければ、む、と申して、さまざまに沙汰しまうけたり。この得意の人々、四五人ばかり来集まりにけり。主、常よりもひきつくりひて出で合ひて、御酒たびたび参りて後、言ふやう、我が親のもとに年ごろ生ひたちたる者候をや、御覽ずべからむと言へば、この集まりたる人々、心地よげに顔先赤め合ひて、もとも召し出ださるべく候。故殿に候ひけるも、かつはあはれに候と言へば、人やある、なにがし参れと言へば、ひとり立ちて召すなり。見れば、鬢はげたる男の、六十余ばかりなるが、まみのほどなどそらごとすべうもなきが、打ちたる白き狩衣に、練色の衣のさるほどなる着たり。これは給はりたる衣とおぼゆ。召し出だされて、事うるはしく扇を笏に取りて、うづくまりゐたり。

家主の言ふやう、やや、ここの父のそのかみより、おのれは生ひたちたる者ぞかしなど言へば、む、と言ふ。見えにたるか、いかにと言へば、この侍言ふやう、そのことに候。故殿には十三より参りて候。五十まで夜昼はなれ参らせ候はず。故殿の、小冠者、小冠者と召し候ひき。無下に候ひし時も、御跡に臥せさせおはしまして、夜中、暁、大壺参らせなどし候ひし。その時は、わびしう、たへがたくおぼえ候ひしが、おくれ参らせて後は、など、さおぼえ候ひけむと、くやしう候ふなりと言ふ。主の言ふやう、そもそも、一日、汝を呼び入れたりし折、我、障子を引き上げて出でたりし折、うち見あげて、ほろほろと泣きしは、いかなりしことぞと言ふ。その時、侍が言ふやう、それも別のことに候はず。田舎に候ひて、故殿失せ給ひにきとうけたまはりて、いま一度参りて、御ありさまをだにも、拝み候はむと思ひて、恐れ恐れ参り候ひし。さうなく御出居へ召し入れさせおはしまして候ひし。大方、かたじけなく候ひしに、御障子を引きあけさせ給ひ候ひしを、きと見

上げ参らせて候ひしに、御烏帽子の真黒にて、まづさし出でさせおはしまして候ひしが、故殿のかくのごとく出させおはしましたりしも、御烏帽子は真黒に見えさせおはしましたが、思ひ出でられおはしまして、おぼえず涙のこぼれ候ひしなりと言ふに、この集まりたる人々も、笑みをふくみたり。また、この主も気色かはりて、さてまた、いづくか故殿には似たると言ひければ、この侍、そのほかは、大かた似させおはしましたる所おはしまさずと言ひければ、人々ほほ笑みて、ひとりふたりづつこそ逃げ失せにけれ。

〔『宇治拾遺物語』による〕

注 御出居……応接する場所。 後見……年若い主人を補佐する人。 む、と……はい、と。 返答の声。

不定げ……確かで無さそうな様子。 得意の人々……親しい人々。 練色……淡い黄色。

小冠者……元服をした少年の呼称。 大壺……便器。

問一 文中の語句「狩衣」「烏帽子」の読みを、それぞれひらがなで書きなさい。

問二 波線部①～⑤の語句の意味を、本文に即して書きなさい。

- ① つゆかはらず ② 術（ずち）なく ③ そらごとせじ ④ すさまじからぬやうに ⑤ おくれ参らせて

問三 傍線部A「袖もしほりあへぬほどなり」とは、

(x) 誰のどのような状態か、(y) この時、その人物はそうなった理由をどう説明したか、現代語で書きなさい。

問四 二重傍線部(1)「見あげたる」、(2)「賜び」、(3)「いらへ」、(4)「うづくまりゐたり」の主語は誰か。あてはま

る人物を次のうちから一つずつ選び、記号で答えなさい。(ただし、同じ記号が重複してもよい。)

ア 侍 イ 主 ウ 故殿 エ 後見 オ 得意の人々

問五 点線部(い)「おのれ」、(ろ)「これ」とは、誰のことをさしているか。あてはまる人物を次のうちから一つずつ選び、

記号で答えなさい。(ただし、同じ記号が重複してもよい。)

ア 侍 イ 主 ウ 故殿 エ 後見 オ 得意の人々

問六 傍線部B「昨日今日の者のかく言はむだにあり、いはむや故殿の年ごろの者のかく言へば」とはどういうことか、指

示語「かく」の意味がわかるように、説明しなさい。

問七 傍線部C「この侍に事の次第言はせて、聞かせむ」とは、何のためにそうしようと考えたのか、答えなさい。

問八 傍線部D「この集まりたる人々も、笑みをふくみたり」という反応が起こったが、その原因となったのは、侍のどの

ような発言か、説明しなさい。

問九 傍線部E「この主も気色かはりて」について、主がどのような状況であるのか、説明しなさい。

問十 宇治拾遺物語は説話集であるが、次のうちで最も古い時代に成立した説話集を一つ選び、記号で答えなさい。

ア 癡心集 イ 今昔物語集 ウ 十訓抄 エ 日本霊異記 オ 沙石集 カ 古今著聞集